癒報 籠屋新聞

2面	歩いたり、休んだり　2012年7/28～8/11
3	近江八幡市で廣島一夫竹細工展
4	〈読書〉『伝播』(中森美方)、「ぺり」(高村光太郎)
5	股裂きにあう維新の申し子 ― 森有礼
9	再び、歩いたり休んだり　2012年9/3～9/22
10	トラック・マンションは行く
11	三浦梅園『玄語』の「素」ならしめるのは難しい
12	〈映画〉「最初の人間」原作：アルベール・カミュ
14	「廣島一夫語録」から
16	シアヌークからの手紙　故馬渕直城を想う
18	「いつか臥蛇島へ」臥蛇プロジェクトの面々
19	〈読書〉『内なるカラ』(綾井健著)
20	再四、歩いたり休んだり　2013年5/12～6/30

種田山頭火に少し触れてみた。救いがたい己の愚行(ぐこう)に愛想をつかし、ざんげと自棄をくりかえす。そうした現実とは別に、「愚になる」ことに憧れている。同じ「愚」でも使いわけている。後者を目ざす心がぶれないのは、愚をしでかすたびに、新鮮な心でざんげしているからである。

PHOTO 荒川健一

肌寒くなってきた十月末の飯干峠で背負カゴを編む。2009年

籠屋新聞社
甲鳥川市代(だい)623
E-mail
kagoyamao@gmail.com

トカラ塾H.P.
http://www.tokarajuku.sakura.ne.jp

紙代・送料カンパ受付中

郵便振替
00160-1-11979
加入者名
籠屋新聞社
ロウヤシンブンシャ

同封の振替用紙をご利用いただければ、これに勝る喜びはございません
― 社主ケイハク。

歩いたり、休んだり、騒いだり、黙ったり

2012年7月～2013年5月

〈この一年の動・不動のホンの一部から〉

7/28 トカラ塾（小田急線梅ケ丘駅前ギャラリーGALAで）

7/31 「半田正夫の日出征記『解読』」

新潟・長野へ向けて鴨川を発つ。トラック・ヨシヨシに寝具・炊事具を載せて。初日は笠間の風土記（茅山明主宰）へ。初めてのETC装着。初めての高速道路金区間使用。初めてのエヤーコン無遠慮使用。世の中、暑さと寒さしかないのですね。

風土記に到着する前に、黒田隆氏とおとなう。笠間市在住の陶芸家で、急須ひと筋に生きてきた人。社主は八年七月を同地で過ごしたことがあり、その間に交友を深めた。今回は、同氏の連れ合いの逝去のお悔みに出向いた。

夜は茅山明氏と飲む。

8/1 北関東自動車道～関越自動車道を経て、小出（こいで）インターから一般道へ入る。午後二時に旧栃尾市（現、長岡市）の栃堀に到着。川谷兄弟を軸にして若者たちがこの地で農業に精を出している。この日は四人が出働していた。社主も加わり、鶏小屋造りをする。ブユの多さに驚く。実に四十五年ぶりの痛痒さを味う。トカラ（鹿児島県十島村）の中之島（なかのしま）は、現在ではほぼ撲滅されているが、以前はブユ（方言はブト）の巣窟であった。それほど清流が流れているからだった。この栃堀も清い水の里なのだろう。しかし、その害はあなどれない。さっそく、十島村に対策を問い合わせてみる、と社主が受け合うも、いまだ、ロばっかり。

8/2 朝食を皆ととり、八時前に十日町（とおかまち）へ向う。

「染織のための自然素材展IV」見学のためである。会期の初日であり、十時から山本あきよかしむさんの制作した面を被っての、パレードが行なわれるとのことで、それに間にあわせるべく早出発となった。出展者は十六人である。

風を引いたのは、あまよかしむさんの展示する植物素材の収集と展示法であった。四十七種の植物で細縄をない、それを長さ三十センチほどの糸巻きに巻いて展示されていた。題して「仮名手本（かなでほん）草縄合（くさなわあわせ）」

0.0.0.

8/3 十日町から国道11号を南西に向う。豊田飯山インターから上信越自動車道に入り、小諸インターで一般道に出る。そこに重田穂積(通称重ちゃん)が待っていた。カゴ補修ワークショップを植木職の涌井(?)さんの竹林前の原っぱでする。参加者は延原さん、重ちゃん、それとケンちゃん。ケンちゃんはすごい。社主著『竹細工入門』を読みながらで、買物カゴを編みあげてしまった。縁を巻き直したら、別人のような色男カゴに変身した。

8/4 標高七百メートルの高原の涼風はスグレモノであった。鴨川へ向う。ケンちゃんが握ってくれたオニギリ三つを貰って、関越道を南下。反対側の下り車線は渋滞している。

8/5 朝八時から代(だい)部落(戸数65)の鎮守の森の掃除。

8/6 終日、ゴロンゴロン。暑さにやられたようだ。アカスケ(オス猫五歳)も付き合う。

8/9 荒川健一運転の赤い車で近江八幡市へ向う。中山銀士も同道。廣島一夫作品展会場へ。

8/10 荒川健一は終日撮影。廣島一夫の竹作品群と、同時に展示された若手作家たち数人の作品を撮る。中山銀士(ブックデザイナー)と社主とは隣り町の草津に建つ琵琶湖博物館を訪ねる。四ヶ月前にここの学芸員となった大久保実香嬢の案内を受ける。

琵琶湖固有種のニゴロ鮒(ふな)で作る醸酵食品・鮒鮨は有名だが、その鮒の産卵場所が失われ、固体数が激減しているという。

原因は、田とリと湖のつながりを人為で断ち切ったため。

8/11 竹展会場、NO-MAの三階大広間で社主の講話。つづいて、鉄平氏(日之影町在住の竹細工師)との対談。盛会。参加者65~80人。

長野から重田、松尾、露之が来てくれる。大阪から田宮が、岡崎から嶋村博が、東京から森が。(敬称略)野川夫婦とその娘も。翌日は徳島の石川文江も。アメガト。廣島一夫の作品群にウナラナイ人はいなかった。

(対談:小川鉄平氏×シャシュ)於NO-MA

PHOTO 荒川健一

『伝播 第三十号』中森美方著
（『滅びゆく家族の記憶の断片』思潮社 2013年3月刊 所収）

「be動詞」

人を介して、「緊急の会議を」たいから」という知らせを受けて、主人公がスガヤさんに喫茶店に逢いに行く。待ち受けていたのは、be動詞についての弁舌であった。だれのあいづちも待つでもなく、延々と続く。その光景は、混濁の時間の合間にあっては、すがすがしくすらある。しかし、主人公の眠は別にある。

「普通ではない」と映った。一時間たっても饒舌は止まらない。主人公が「仕事がありますから」といって立ち上がっても、スガヤさんは話し続けていた。

「スガヤのbe動詞はあやうく、宙づりになっていた」と主人公はいう。読んでいるこちらは、スガヤさんは生そのものすべて宙づりにしているのではないかと、ハラハラした。場を読めない孤行をあぶり出されたようで落着かない。それにしても、次々と詩集を刊行する中森氏創作意欲は並はずれている。

（高村光太郎『パリ』『典型』所収）

「島嶼化の心理」（改題）

故郷は遠く小さくけちくさく、うるさい田舎のやうだった。私はパリではじめて……詩の真実に開眼され、そこの庶民の一人一人に文化のいはれをみてとった。悲しい思で是非もなく、比べやうもない落差を感じた。

日本の事物国柄の一切をなつかしみながら否定した。

光太郎と社主とは生きている時代が五十年違う。コトバは同音であっても、含みが異る。それを承知しているつもりでも、同じ地平に生息している親しさが迫ってくる。

社主が書物を所有するときのクセなのだが、一字一句を自分の発語に置き換えてみたくなる。まず「故郷」を「都市」に、「パリ」を「島」に置換する。次に、「庶民」を「島の人」に、「文化のいはれ」を「ありたい人」に換える。そうした作業の後に、発語のひとつひとつを肉付けする。人間の匂いが消えた遠い地が「都市」であり、人口密度の高い居住区という意味ではない。同じように、最初に出会った「人間」が「島の人」であり、「人間の匂い」が発散していた。

そう直感した数十年後に、述懐するのである。

「（故郷を、都市を）なつかしみながら否定した」のだと。

光太郎は父・光雲の暴を、社主は"かけ足ニッポン"を葬ろうと急く。

平島港 2009年11月 荒川健一撮

クワズイモ
（サトイモ科）

光太郎の故郷・故国回帰の前に森有礼（ありのり、初代文相）の先祖返りがあった。

服裂きにあう維新の申し子

森有礼（ありのり）は薩摩藩の下級士族の出である。明治維新（一八六八年）を迎える二年前の一八四七年に生まれている。初代伊藤博文内閣の文相をつとめている。明治二十三年に四十三才で他界するまで、維新政府の表舞台を歩み続けた人と言える。

有礼は絶えずこれに何かを言い聞かせる人であった。十三才で藩校の造士館に入るが、後日新設の洋学校に転ずる。十八才になったとき、「士可看条々（士たるべき条々）八箇条を書く。その内容は健康保持への戒めであるが、「絶欲」、「絶色」の文字も見える。あいまいな軌道修正を認めない、激しい句々をつらねている。潔癖とも言える克己心の表現であり、その精神は生涯ついて回ることになる。文相になってからでも、官邸自室に「自警」と題する句をかかげ、「一その職に死するの精神覚悟あるを要す」と、武士道の精神をもって教育。自由を守り抜く構えを吐露している。その精神を守らない相手を許すことが不得手であったから、結果として、孤塁を守ることになった。

◇　◇　◇

藩命により、ヨーロッパへの密航を果した有礼は、西洋文明の先進さに驚嘆の日々を送る。そして一日も早く封建的な旧習にまみれた身体を洗い流したい、と友人へ書簡を送っている。

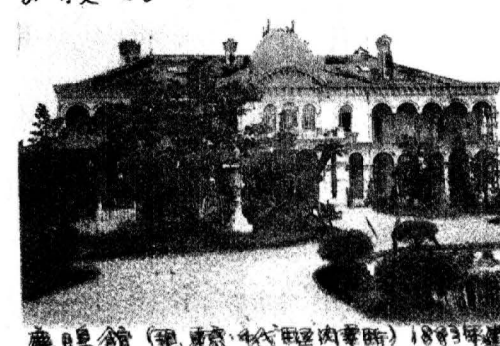
帰国後の有礼は、周囲から「洋癖」と呼ばれるほど、西欧化の権化となり、その一途さが『明六雑誌』を創刊して、西洋思想の導入を説く。また、鹿鳴館（ろくめいかん）を献策し、自身も西欧ダンスを踊った。夢は自身の日常にも及び、婚姻にも求められた。

慶応二年（一八六六）にロンドン大学在籍中の夏休みを利用してのロシア旅行の折りに、現地での「夫婦の別」に触れて、それが徹底されなければ、文明は進歩しない、とすら考える。この「別」とは女が男に隷属しないことを意味している。そして『妻妾論』を著して、旧態依然たる妻妾同居の風潮を難じて、一夫一婦の制を力説してやまなかった。

廣瀬常（つね）との結婚は夢の確認であったろう。陽極女学校に通うハイカラな常は、招聘されてアメリカから渡ってきた模範学者のラインマンの見初めるところとなるが、南北戦争当時校則にのっとって結婚を許さなかった。ラインマンが有礼の紹介で廣瀬家に入れが決まった人であり、当人同士は知己の間にある。この一件が発生した二年後に、問題の校則が削除されたのだが、この手腕との微妙な処置は有礼の勧告によるとされている。

◇　◇　◇

その後、どのようないきさつがあったのかは分からないが、有礼と常とが結ばれることになった。



鹿鳴館（現、東京・千代田区内幸町）1883年建設

常は薩摩とは敵対した幕臣の娘であるが、そのような前歴にこだわる有礼ではなかった。八歳年少の常は十九歳になっていた。美貌の才女として有礼の前に現れた常は、国益にとりわれないどころか、欧化思想の共鳴者でもあった。ダンスも踊る娘である。

明治九年に耶蘇教式の結婚式を挙げる。式の内容は周囲の目を驚かせる洋癖の塊であった。洋装の常の手を取って式場に現れた有礼が、まず皆を感嘆させたのは、婚姻契約書がその場で読みあげられたことである。その後別室で立食パーティーが開かれた。畳の間に正座して、角隠しのかぶり物を頂いた新婦と三三九度の杯を交わすわけでもないのだから、これは常軌を逸した婚礼と思われてもしかたがない。

当社主がここで取りあげるのは、有礼の洋癖の徹底ぶりを披露することではない。修正を許さない一直線の行動が、その後常との離縁をもたらすのだが、それは有礼ひとりの苦悩ではなく、洋学にゆさぶられた維新の著者たちに共通する負荷でもある。そのことをここでべらべらお喋りしようというのである。

憲法発布式典を終えて観兵式へ向かう天皇の一行。明治22年2月

有礼が明治十二年にイギリス公使に任ぜられたときに、それ以前に清国に赴任したときと同様に、妻子を伴っての渡航であった。現在では当り前のこととなっているが、配偶者を連れ帰る習いは、当時の日本には稀であった。

常は公使夫人として、赴任地の社交界に登場する。敬愛する有礼の翼の下で、水を得た魚のように、伸びやかに西洋ダンスに興ずる日々であったことだろう。

その常が英国から帰国して間もなく、結婚契約の破棄に同意する。つまり、離縁である。破棄の因は公にされていない。ただ常が産んだ新生児が、当時の日本人とは目の色が違っていたことが有礼を苦しめる。後日、有礼は秘書官の木場に漏らしている。『森先生追悼座談会』から再録すると、

「日本の教育のない女にあんなことをしたのは自分が誤りであった。日本の女をああ云う風に扱ったのは悪かった。女が離婚されないと云う保証をうけたので軌道を逸し、自分は怨んだ目に遭った」

こうした記録がのこされていると教えられたのは『森有礼』（大塚孝明著　吉川弘文館人物叢書）である。

苦渋の胸の内を払露する有礼であるが、夫婦が手を取り合って洋癖の貫徹を図ったその線上に常の行動があった、とは捉えられていない。西洋人とダンスを踊ることは洋癖の主意に反することではないのだから、破棄の根拠が、踊る以上の間柄に進んだことにあるのは間違いない。では、どのような話し合いが夫婦間で交わされたであろうか。

常は有礼の問いは何の用意もなく、保守の弁明すら思い浮かばなかっただろう。自分を護ってくれるであろう環境の下での安心が先にあった。その点では、単純で不用心な女と言える。恋愛真中の有礼にとっては、その不用心さが伸びやかさに写ったのかもしれない。常には、あらがう心がなかったようだ。いくら契約の上に成り立った結婚だからといっても時の風潮を無視するほどの覚悟ができていたとも思えない。姦通罪に相当する行為であることを自覚せざるを得ない。

有礼の側も契約結婚であることを忘れてはいない。また、世間体を配慮するならば、なおさらのこと、刑法を盾にとって常を追いつめることはできない。そんなことになれば、自らの足元をすくうことになる。平生の主張と周囲の現実とに挟まれて逡巡していたふたりである。

このことは、有礼の思想がいい加減であるとか、常が軽佻浮薄の極であるとかいう議論には発展しない。

有礼自身の表現を借りれば、「封建的な旧習にまみれた身体」を洗い流すことができないでいるに過ぎない。それは勇気が不足しているからではなくて、投げ出すことのできないほどに尊い教えを幼少時から受けていたからである。先述したように、自我の芽は少年時だけではなく、文相に就任してからも掲げている。現代人にとっては剛直と思える養心が洋癖を遂行させたのだった。それは、武士道の精神であり、同時に儒学の力をも加味されている。死期の迫った実父への孝行心は時代の手本であった。（→次頁）

内村鑑三（1861～1930）

失職

宮武外骨（1867～1955）

逮捕

不敬罪
重禁固三年

森有礼（1847～1889）

暗殺

前号（37号）の発行は1年前だった。廃刊の心配のない、不死身の新聞なのだ。

洋癖は、程度の差こそあれ、明治の"開明家"たちに課せられた姿勢である。その身辺には共通の落とし穴がめぐらされている。詳細は、紙面の制約から、別項にゆずるが、論吉、鑑三、外骨、歌外などにもみられる。

◇　◇　◇

常との結婚生活が破綻した三年三ヶ月後にさらなる不幸が待っていた。有礼はすでに再婚して、一子をもうけていた。家庭の立て直しを図っている最中の、帝国憲法発布の日に、国粋主義者によって暗殺されたのである。明治二十二年二月十一日のことだった。伊勢神宮参詣の際の行動が不敬であったとの報道に呼応して起こされた事だった。

当日の動きは象徴的である。発布の祝賀風景はお祭り騒ぎのそれであった。新橋－上野間に開通していた鉄道馬車の沿線に大緞門（マーチ）が設けられ、電飾が施される。沿線に建つ白木屋（しらきや）は酒樽の鏡を抜いて、飲み放題とした。酔っ払いのやまが築かれると、その人たちを上野の公園へ荷車で搬入した。（『明治百話』下巻　篠田鉱造　岩波文庫　270頁）

そのほか、祭礼の山車が市中からドッとくり出して、和田倉門へ集中したから、死人まで出る騒ぎとなった。また、新吉原からは二十名の芸妓をくり出して、手古舞（てこまい）を披露する。それとは別に、白襟紋付き姿の芸妓百五十名を行列させる。新橋や日本橋の芸妓も手古舞を舞い、丸の内へくりこもうとしたが、止められている。「醜業婦はお膝元へ入ってはならぬ」という理由からであった。

芸妓は欧化を押し進める人間と同様に、汚らわしい人種に組み入れられている。森有礼は西洋ダンスを、そして、芸妓連は手古舞を、自由意志の発露として踊ったはずなのに、共に抹殺されるべき道を歩んでいる。ただ、前者はシュールな振る舞いをした配偶者をもその手で消さなければならなかった。

◇　◇　◇

家族を愛していた常は、夫と三人の子から引き離されて、ひとり暮しを余儀なくされ、やがて精神に異常をきたす。その後どうなったのか、いつ果てたのかは誰も知らない。ただ、有礼の方が先に逝ったことは事実らしい。その分、有礼は思い悩む時間がなくてすんだ。欧化のやりきれなさは消えることはないのだが――

PHOTO　荒川健二

夕ぐれの　飯平（いいだいら）

9月の動きはバタバタだった。よくないョ。ハンセイ。といってもすぐ忘れるけど。

2012年秋

9/3 熊本県八代市在住の前山光則氏が来鴨。高校教師時代は県下の定時制高校を渡り歩いた人で、全日制校では味わえない特異な逸話の持ち主。

9/6 トラック・マンションを転がしながら西へ。高速道路を走る。東名、名神を一気にかけぬけるのは初めての経験。快適。初日は四日市市内のスーパー銭湯の駐車場で一泊。

9/7 岡山の長船町に守屋を訪ねる。父親の故ポン(山田塊也)の思い出話を語ってもらう。近くに住む妹の唯摩も同席した。今手がけている「半田正夫証言集」が終ったら、本腰を入れてポンを書こう。

9/8 周防大島の高不泰伸宅の庭先に車を停め、近くに住む柳原一徳(みずのわ出版代表)宅で酒食の宴。

再び 歩いたり休んだり

9/10 別府市の涼宅泊。三十三才の竹工職人。

9/11 宮崎県日之影町に小川鉄平氏を訪ねる。ひと月前に近江八幡市での廣島一夫竹展で対談した相方。同道者は荒川健一と涼。夜、道の駅「青雲橋の裏手に建つ神楽殿の前庭で一泊。寒い。

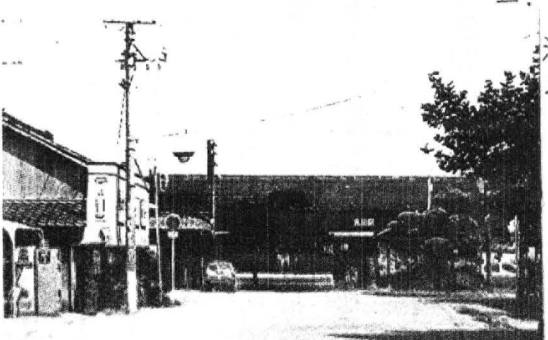
9/12 荒川と社主は、荒川の車一台に乗りこみ鹿児島へ向かう。トラックは涼が別府へ廻送。夕方、鹿児島市の天文館の居酒屋"むじゃき"で友人たちと集う。同席者は平島に向かう七人(石塚雅彦、渡辺俊夫、荒川健一、和賀正樹、舟木拓生、橋爪太作、ナオ)の他に、柳田泰(鹿屋市)、岩元泉、三津子夫婦(鹿児島市)、橋口かよ(いちき串木野市)、小川景一(鹿児島市)。驚いたのは、中之島の海游倶楽部の米川理恵子が、たまたま市内に出てきていたので合流した。パートナーは岩手で紹介した早川信久氏。トカラの海に魅せられた末に、国際水中映像祭を中之島で企画、運営した人。ジャック・マイヨール、ウンベルト・ペリッターリとも親交があった。

9/13 朝八時過ぎに平島上陸。

9/14 台風接近のため次便のダイヤは遅延の公算が大きいため、急きょ鹿児島に戻る。

9/15 荒川とシャシュは水俣市の井上克彦氏(竹細工師)を訪ねる。十年ぶりか? 夕方、大口経由で人吉市へ出て、ゲスト・ハウス夢屋泊。

9/16 球磨川を遡上する。といっても車で。水上村へ向かう。途上、シャシュの竹の師匠宅を捜し当てる。旧宅は取り壊され跡地に娘さんが食堂を建てていた。

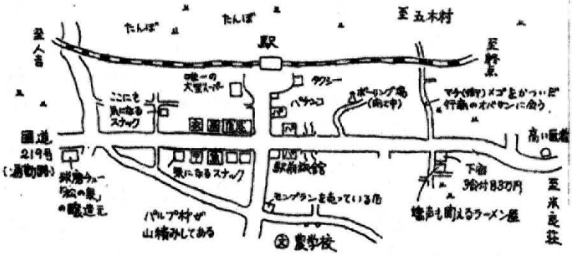


竹修業中に下宿していた免田町の国鉄駅

娘夫婦と再会する。三十六年前がきのうのことのよう。

水上村では阿部ちゃん宅で昼食をご馳走になる。ナガ(スワセ島在)がロフトから落ちてケガをした家。その後、近くにいるマモ(守)宅に寄り、釣ってきたばかりの鮎の塩焼を何匹もペクつく。四時過ぎに大河内峠(椎葉村)を越えて日向市の成合昭一宅へ向かう。台風による豪雨が峠道をリにしてた。9/17朝、諸塚村の甲斐耕平さんに案内されて

《下宿周辺をご案内。昭和52年7月現在》



熊本県山都町馬見原の遠下集落へ行く。この地がサカの集合・通過地であるがごとき記述が民俗学を修める学者によってなされているが、根拠に乏しい。具体的は書名は『山窩物語』(井上清一著)、『私の日本地図⑪阿蘇・球磨』(宮本常一)、『山に生きる人びと』(宮本常一)である。だいたい、サンカというコトバが同地、あるいは周辺の広い範囲には存在しない。箕作り、ないしは、箕作りカンジンドンの呼称はあるが、滝下集落を特定するものではない。詳しくは後日の号にゆずる。夜、日向に戻る。

9/18 日之影町八戸の養護老人ホームに入所中の廣島一夫翁(97)を訪ねる。職務に染みる竹談義を拝聴。夕方、日向に戻る。

9/19 北上。大分市西郊の由布市在住の深瀬宅に寄る。農業実習で当新聞社の近くにある三芳村に居住したことのある。昼食をふるまわれる。遠藤元氏(竹細工)も合流して。夕方は別府市に着き、若手竹職人5人+荒川健一+社主とでカンパイ。厨川の居酒屋で。

9/20 岩国市広瀬の堀江宅で、これまたカンパイ。地元の面々、藤井吉朗氏に加え、滋賀県在住の今北哲也氏も同席。炭焼きをしたり、マツリを企画したり……。

9/21 広瀬商店街の空き店舗を使そのカゴ編み教室

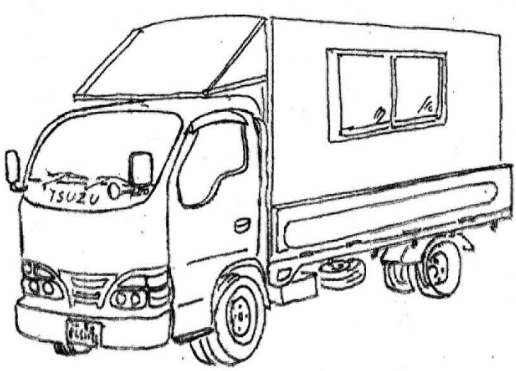
9/22 一路、東へ。

本社仕用 超ゴーカ・トラックマンション

イスズ・エルフ 1屯半

製作費:古材回収能力

プラス 釘代。2008年製



『玄語』岩波書店 日本思想大系41 1982年

シャシュは学を思ったこともない、文字を信じたこともない。それなのに、何と通じているのか。シャシュがたいした人間だからではない。梅園があまりにも素だから、コトバのひとつひとつがこちらの胸中に飛びこんでくる。つまりは、こちらが空っぽであればあるほど、飛びこんでくる勢いは増す。喜んでいいのか、哀しんでいいのか、分からない。

読み進んでいく途次は、翻訳の連続である。手元に用意された、貧弱な収蔵語句の抽出しは激しく開け閉めされている。その語句のすべてが、手前勝手の造語なのだから、他人に管理を強いることもままならない。一例を挙げよう。

「染めるのはやさしいが、素ならしめるのは難しい。」（『玄語』の七行目）

シャシュが二十二歳のときだった。朝、目覚めるのが怖かった。せっかく睡眠をとって、その間と自覚なしに過ごせたのにまたしても、ドロドロの一日を始めなければならない。何を手にしていいのかが分からないのだから、時間などないほうが、どれだけ気楽か、と呪う毎朝であった。それでも、首をくくることなど、考えない。何が、名（迷）案はないものか、と思案した。

模索の第一歩は、感情のおもむくままに時を過ごせないものだろうか、という欲をかくことであった。「おもむくまま」とは「自己に従う」ということである。あら雪外からの力をはじき飛ばさない限り、小さな決断はへし曲げられてしまう。そんなあがきの果てに思いついた法が、贅肉（ぜいにく）をこそげ落とす作業であった。ここで「白紙還元」という造語が生まれる。現実には、新生児を除いて、白紙の人間はいないのだから、造語の内実は、あらゆる雑音から身を守り、さらにすすんで、これまでに身にまとってきたボロをかなぐり捨てることであった。それでも素にはなれない。この間隙（かんげき）を何で埋めようとしたかというと、肉体を酷使して、思考エネルギーを可能な限り、ゼロに近づけることであった。

これがシャシュの「素ならしめるのは難しい」である。

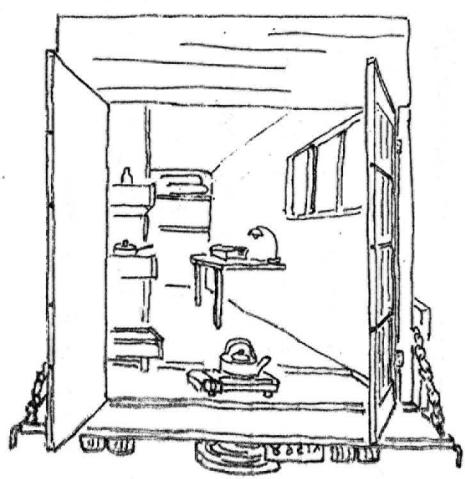
◇ ◇ ◇

『慈悲無尽興業越春並約束』

梅園34歳・宝暦6年（1756）作

「一村のうちは、よき事あればうちよりて喜び、悪しき事あれば、うちよりて悲しむ事、たとへば一家兄弟のごとし。さるによりて病人をばたすけあひ……」

富澤賢治の一世紀半前の文章である。



トラックマンション内部（左右が反対だ）（紙面足らない。つづきはいつか）

いまだ雪は降っていなかった。きょう（2012年二月六日）は大雪注意報が出ていて、鉄道は朝早くから間引き運転をしている。みぞれまじりの冷たい雨が間断なく歩道を濡らす。通る人はまばらである。

夕方に人と逢う約束をしているが、まだ間がある。シャンゼは神保町（東京・千代田区）の交差点に立っていて、岩波ホールの看板が目に入る。どこか外国の映画を上映していること、タイトルも確認せず、衝動的に入る。

映画の舞台はアルジェリアであった。記憶の連鎖が『アルジェのたたかい』につながる。五十年前に観た映画である。フランスの植民地での独立闘争を、ゲリラの側から描いた一作だった。妥協を許さない戦いの場面は血なまぐさくもあったが、素手で権力に向かうアルジェの民の姿に胸を熱くした。

最初の人間

Le Premier Homme

監督：ジャンニ・アメリオ（伊）　原作：アルベール・カミュ

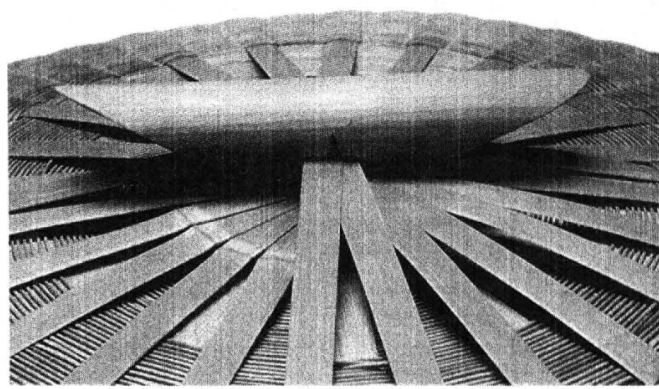
今回の映画も独立前のアルジェが舞台となっている。アルジェリア出身で、パリ在住の小説家が母親を訪ねて里帰りする。タイムスリップしたスクリーンに、小説家の幼児期の暮しが映し出される。入植者一世であった父親は早くに戦死し、母親とその弟であり、主人公にとっては叔父である人たちの愛情に包まれて過ごす幼児期が描かれる。

里帰りしたのが一九五七の夏で、独立戦争のただなかにあった。いや、映画では「戦争」のコトバも「独立」のコトバも声高には語られていない。主人公は「この地でひとり暮らす母を傷つけたら、わたしは君たちの敵となるであろう」とゲリラ側に宣告する。一方で、処刑が迫っているゲリラの一員、それは主人公の幼友だちの息子なのだが、その若者の救援に奔走もするのだった。それがためにフランス人からは非国民呼ばわりされる。

観み終って街に出る。「時代は確実に動いているのだ」と、感じ入る。斗争史を語ってはいないところに、五十年の流れがあるのなら、すばらしい、と伸びやかにつぶやく。が、それが的はずれの感想であることが直後に判明した。原作は「アルジェのたたかい」の制作以前に書かれていたからである。ノーベル文学賞を受けたアルベール・カミュが交通事故死したのが一九六〇年である。現場に残されたカバンのなかに『最初の人間』の未完原稿が収められていた。この事実をシャンゼが知ったのは、退場時に入手した案内

（十三頁下段）

廣島一夫の作品から



荒川健一写す

（十三頁から／）パンフレットからだった。シャシュはその著作を読んだことがない。"文字から遠い人間"の泣きどころであり、同時に、カシュは少なくとも五十年の先を見ていたのだという事実を知ったとき、無知の横之の無さがカシュを讃えていた。

メンカゴ（宮崎県日之影町）

暑い折、飯を入れて涼しい軒先に吊しておく。鹿児島県ではメントリカゴと言う。

カゴの類をショーケ、ソーケと呼ぶのが日之影の習いであるが、これだけは「ーカゴ」と呼んでいる。

直径四十センチ　高さ四十二センチ

まずは「廣島一夫のあゆみ」（現代の名工・廣島一夫の手仕事　展示会記録集から抜粋）

大正4（1915）宮崎県西臼杵郡岩井川村（現・日之影町）樅木尾（もんぎゅう）に生まれる。

昭和5（1930）隣り村・七折村の竹籠職人に弟子入り

昭和8（1933）独立。村内・ならびに隣接集落の家々を訪ね歩いて注文製作を始める。いわゆる"じかためぐり地方巡り"をする。

昭21（1946）北郷村宇納間に移り、姉の息子を弟子にとる。

昭34（1959）日之影町七折に仕事場を移す。

昭57（1982）ニューヨークの日本協会の慰行団が製作現場の見学に来る。

昭63（1988）スミソニア協会・国立自然史博物館に約170点の作品が収められる。

平成6（1994）スミソニア協会・サックラー美術館で「日本の田舎のかご職人展」が開かれる。

平9（1997）米国内で巡回展開催

以降　日本国内でも廣島一夫作品展が企画される。

平25（2013）三月没　九十八歳だった。

「二流の人」

これは安吾の小説のタイトルではない。

△　△　△

廣島一夫氏の薫陶を受けた若手竹細工師のT氏（38）がジャシュに語ってくれた逸話がある。それは自分の両親が廣島一夫翁の元にアイサツに出向いたときに吐かれたコトバだった。翁が八十台後半に入ってからのことではなかったかと思う。そのコトバというのは、

「竹細工はお金になりませんョ」

だった。言外に「貧乏を覚悟しての精進がこの稼業にはつきものですが、それでも息子さんも見守っていてくださいますか？」の、翁ながらの思いやりが含まれている、とジャシュは解した。この話をT氏は笑顔で語り、聞いているジャシュの頬もゆるむ。ジャシュ自身が、「おんなべて、カゴ屋は貧乏」と思っていたから、共感の笑いと浮かべたのである。笑いに自虐が込められていたかどうかの記憶はない。

故廣島一夫氏
享年九十八歳

翁は本年（2013年）の三月に他界した。享年九十八歳。ジャシュは葬儀には参列できなかったが、四十九日の法要には顔を出すことができた。帰りにショウケのひとつを遺族に託されて、それを持ち帰る。（トラックマンションの移動であるから、引越荷でも引受けられるのだった）これを届ける先は、T氏さんである。翁が他界する九月前に催された竹細工展のひとりである。翁の人と仕事に惚れ、何とかして、翁の元気なうちに展示会をもちたい、と東奔西走の労を惜しまなかった人への贈り物である。

企画者

ショウケは関東ではザルと呼ばれている。持ち帰ったショウケをT氏さんに手渡す前に、企画に参加した別のひとりであるしろさんに披露する機会があった。この人は別府の「竹の学校」を修了した後、長野県の松本市でミズ竹細工の再興に取り組んでいる。

正円を描くショウケの縁の厚みは均一である。直径が四十八センチ、深さが十センチある。

瓶報籠屋新聞の創刊年がやっと判明した。『季刊無尽蔵 11号』の139頁に「昨夜から」とある。

美しく巻かれているザビゴの幅が八〜九ミリで、それが小波が岸に寄せるようなありさまで、重なることもなく、かといって、途切れることもなく打ち寄せている。眺めていても飽きない。この縁巻きが上手にできるようになれば一人前ということになるが、これはひときわ美しい。

連続するビゴとビゴとの間には一分の隙もない。だから「下地とおし間」見ることもできない。かといって、機械編みのような、計算ずくめの息苦しさは感じられない。一ミリにも満たない違いではあるが、ビゴ幅が不揃いであることが、作り手の体温を感じさせてくれるからだろうか。ショウケを手にとって、感心しながら眺めていると子さんが教えてくれた。

「廣島さんは、縁を巻く前に捨て巻きとしてましたよ」

つまり、試し巻きをしていたと言うのだった。縁巻きビゴが同じ間隔を保ちながら、縁を一周し、最後のひと巻きが終わると、ビゴが二周目に入る。それまでと同じ間隔を保って巻き進んでいけばいいのだが、二周目の最初のひと巻きは、思い通りにはいかない。ショウケは七周することで、全部を巻き終わる計算になっているが、間隔の取り方が大きすぎたり、ビゴ幅が狭すぎたりすれば隙間ができる。逆に、幅が広すぎれば、巻きビゴが重なり、滑らかな表面にはならない。翁は納得のいくまで、試し巻きをくり返して、納得のいく幅と間隔をはじき出したことであろう。

「……それが捨て巻きなんですからねえ」

子さんが嘆息まじりに漏らす。シャシュの無知をさらけ出すと、こうした下作業をする職人を初めて知った。竹細工職人の収入が上向きになれない因のひとつは、機械化がむずかしい素材だからであるが、翁の労働単価はひときわ低い。

そんな環境のなかにあっても、(世の職人たちは)何とかして(作業)効率を上げようと工夫する。それが生活の向上に直結しているからである。たとえば、ビゴの幅を揃えるための刃物を使用するとき、同時にビゴの面取りまで終わらせることを考案した。これまでの二工程をひとつにまとめようと算段した。刃物を二重に並べて、外側の刃で幅を揃え、内側の刃では、揃え終えたビゴの面取りをする。そうした工夫が、技の上昇とともに、収入増をもたらす。

○○○

ところが、翁は他の職人と違っている。捨て巻きが日常となり、美しく納得のいく縁が巻けるようになると、次の工夫が別の箇所で始まる。せっかく手中にした効率の良さが、新規の工夫のためには障害となって、打消されることもありえる。効率の良さを否定はしないが、美しさを求める欲に勝てない。手間を惜しまないエゴイズムの欲が、「竹細工はお金になりませんよ」と言わしめるのだった。

貧乏であるかないか、という問題ではない。語録の真意をくり取れなかったシャシュは、「世の人々」であった。

右の一文はカンボジアから届いた弔文である。故馬渕直城氏の未亡人宛のものだった。故人の友人である三枝洋氏（在横浜市）がコピーしたものを当社へ送ってくれた。

故人は戦場カメラマンとしてカンボジア内戦を三十年にわたり取材を続けた人だった。二年前の秋に他界した。詳しくは37号に載っている。

なぜ、このコピーが重要であるかというと、ポルポト派とシアヌーク国王と故人とが関係を良好に保ちながら、内戦終結を模索していた、という証拠のひとつだからである。

そのことは三枝氏の添え書きからもうかがえる。大国のエゴの餌食になりかねない小国、カンボジアへの故人の思い入れは並ではなかった。全身でクメールを愛していた故人は、「現場に居る」ことを己に言き聞かせながらの生涯であった。弾の飛んで来ない遠距離から望遠レンズをのぞき込むことをよしとしない人である。

その点は、同じ戦場のカメラマンであった（三)頼泰造や岡村昭彦にも通じている。当事国の双方からの取材をこころがけていた人で、ポルポトに三度の取材を経験している西側カメラマンは故人ひとりであった。（三度目はポルポトの遺体確認撮影であった）「原点に立ち戻ること」を念頭におく故人は、クメール（カンボジア）から離れることがなかった。

。。。

His Majesty
King-Father Norodom Sihanouk
of Cambodia

to

Mrs. Sophong Shizue Aoki
[illegible]

Madam,

I felt ashamed to hear about the loss of your husband, Mr. Naoki Mabuchi. Please accept my heartfelt sympathy on the passing of your husband.

I take this opportunity to pay a warm homage to the memory of Mr. Naoki Mach who has wholeheartedly devoted himself to the cause of Cambodia and the Cambodian people who have been a great friend.

Please accept, Madam, the assurance of my high and distinguished consideration.

Norodom Sihanouk

Royal Residence,
Beijing, June 5, 2012

〈シアヌーク（カンボジア）からの弔文（2012年）〉

当社取扱書籍　申込みは同封の振替用紙で　著者（文章）はすべてシャシュ（除く、5番目の「暮らしの一」）

埋み火（うず）　トカラ（鹿児島県十島村）の古老たちの軌跡	えれほん社	3000円
十七年目のトカラ・平島	ふくろう社	2200
密林のなかの書斎	ふくろう社	2500
灘渡る古層の響き（写真：大島洋）	みずのわ出版	4800
暮らしのなかで息づく竹の道具たち（写真：荒川健一）	はれたり くもたり	700
竹細工入門（写真：荒川健一）	日貿出版社	3500
竹組み工芸（〃：〃）	〃	3500
ザルとカゴを編む（〃：〃）	〃	3500
目取真境界の島－臥蛇島の多当金制度（CD版本）	NTS出版	1900

（送料、消費税込み）

再三の「歩いたり、休んだり」

2013.3.1～

3/1 新松戸JR駅からフル・カフェまで歩く。開店後のカフェで飲む。主人の綾子とアチヒシャシュ(ナオ)と。アチ持参の自家ドブロクを。アチは真澄農園と営む下久農家。毎秋、この園のハウスの中で竹編教室を開いている。今秋の課題はザル。

3/2 京成線の曳舟駅前のヤッズに伏木洋平を訪ねる。午後、梅ヶ丘のギャラリーガラの会場を借りて「トカラ塾」開講。夜、曳舟に戻り、アカリ屋を訪ねる。シェア・ハウスになっていて、伏木洋平が合流して、おいしいカレーを飽足になる。

3/5 鴨川から館山へ車で行き、そこから東海汽船の高速ジェット船で伊豆の大島へ。当地に移って四十年になる岩瀬政夫・チズ子夫婦を訪ねる。大島での天然塩の製造を試み始めたころに、共に潮を浴びながら、海水の汲み揚装置開発の手伝いをした。午後、成瀬裕昭・善子夫婦が合流して、おいしいカレーを飽足になる。成瀬夫婦とは三十年前に、大阪南部の羽曳野市で初めて出会った。道路拡幅(または、新設)のために壊されることになった豪邸を友人がもらうことになり、その解体を共に手伝った。その家は、現在、長野県上田市野倉に移築されている。「女神山ライフセンター」という名のセミナーハウスになっている。何十年も経ち、その間に、二、三回しか会わなくても友だちでいられることがうれしい。

3/9 永年、実父の介護をしてきて、数日前にみとった人が近くにいる。その友人の慰労の宴をはる。参会者は、友人・社会の娘の三人。

3/14 宮城県日之影町八戸の廣嶋一夫さん(98)没。

3/24 本社所在地である代の部落総会

3/29 舟木拓生と連れだって影書房を訪ねる。松本昌次さんに会い、トカラ塾での講話を依頼する。1927年生まれの八十五歳。未来社で編集にたずさわり、三年後に影書房を創る。手がけた著作は、丸山眞男の『現代政治の思想と行動』をはじめ、埴谷雄高、花田清輝、藤田省三、本下順二、平野謙、井上光晴、上野英信……

3/30 トカラ塾

4/3 笠間(茨城県)の芳山明宏を訪ね、新緑を味わう。同行者 太作、悠生、水瑠、沙也香。

4/8 延原有紀夫来訪。同道者二名。滋賀の旧朽木村(現、高島市)で無住寺の在家禅堂を開いている飯高転石氏は、最近、千葉県の大多喜町にも堂を開いた。

4/10 トラック・マンションの出番。エリーで有明埠頭から門司へ。船内用に弁当五(食分)を持参。

4/20 廣島一夫四十九日忌参列。

4/22 夕方、鹿児島で亀蛇プロジェクトの面々と再会。深く静かな血潮が流れている。これは

朝日新聞 2013.4.3. 第3種郵便物認可 鹿児島版

いつか 臥蛇島へ

70年に無人トカラ列島の小島。上陸できたら、ほこらの掃除を…

臥蛇島を知っていますか――。1970年に無人島になった、トカラ列島・十島村の小さな島だ。その存在を忘れてほしくないと、県内の3人が「臥蛇島プロジェクト」と銘打ってPR活動をしている。再び人が住めるようになるのが3人の夢だ。

■3人がPR・音楽ライブ

臥蛇島は中之島の西約30キロに位置し、周囲は崖が切り立っている。東には一回り小さな小臥蛇島がある。プロジェクトの代表で日置市の鍼灸師、大竹秀信さん(44)が臥蛇島を知ったのは2008年、翌年に国内で46年ぶりに観測される皆既日食の記念イベントに参加するため、諏訪之瀬島を訪れた時だった。

フェリーで迎えた夜明けの海に、おわんを伏せたような島の姿が遠くにはっきり見えた。「何の島?」と一緒に眺めていた口之島出身の祖父を持つ友人に尋ねた。「臥蛇島です」。初めて聞いたお名だった。「3カ月経っても半年経っても忘れられない。とにかく島が気になって仕方なくなってしまった」

□ □

インターネットや文献で調べると、つい40年ほど前まではふつうに住んでいたと分かった。カツオ漁が盛んだったこと、島民は焼酎をよく飲んでいたこと、人口減少と高齢化で全島移住せざるを得なかったこと。

臥蛇島のために何かできないか。友人で写真家の谷山亮さん(38)と、農業の富田淳也さん(38)に相談し、まずは臥蛇島を知ってもらおうと09年にプロジェクトを立ち上げた。

□ □

毎年4月に鹿児島市で開かれる環境フェアイベントで臥蛇島を説明したガリ版を配り、「臥蛇ロック」と題して音楽ライブを企画。谷山さんが今年2月に開いた個展では、主催にプロジェクト名を使った。谷山さんは「臥蛇島」と書いてあったから来たという客さんもいた」と話す。

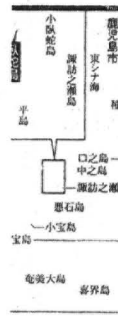
活動の中で臥蛇島の元島民や研究者にも会うことができ、少しずつ輪が広がっている。

臥蛇島は一般の上陸が禁止されているが、「電気や水、医療など問題はあるが、自給できれば人が住むべきだ」と大竹さん。温暖な気候を生かして島バナナ試験的に自宅の庭で苗を育てている。

大竹さんは、活動を元島民や役場に認めてもらって島に上陸できたら、年に1度でも、島のほこらを掃除するために立ち寄りたいという。「島で何ができるか考えると楽しくて仕方ない。何十年もかかるかもしれないけど、死ぬまで続ける」

(金山純子)

臥蛇島プロジェクトの谷山亮さん、大竹秀信さん、富田淳也さん(左から) =日置市



臥蛇島

トカラ列島にある面積約1.5平方キロの小島。周囲が崖に囲まれ、定期船が接岸できる港がなく、高齢化でましけによる過船作業が難しくなったため、1970年7月28日に十数人が集団離島し、無人島になった。戦前はカツオ漁の基地として280人以上が住んでいたが、戦争による疎開や高度経済成長期の人口流出などで過疎化が進んだ。

再び人の住む日夢見て

臥蛇(がじゃ)島再生ドラマの呼び鈴になるのだろうか? 他人ごとではなさそうだ。(谷、俳句)

夜、天文館の居酒屋で、柳田泰、雪丸久徳、橋口かよ、ネシュの四人。23時出港のフェリーとしまで口之島へ向う。中之島の半田正夫氏と合流。

4/27 ひとつ南の中之島へ渡る。早信久宅に二泊。その間、竹カゴ修理

4/29 夜七時、鹿児島港に戻る。

4/30 井上克彦(竹細工)宅を訪ねた後、八代の前山光則宅で夕の宴を開いてもらう。

この日から荒川健一(カメラマン)が同道。

5/1 八代→山都町浜町→山都町馬見原→八代→人吉→水上村の稲葉守宅着。

5/2 諸塚村の甲斐耕平氏と共に村内七山に行き、藤本二郎(小原井)と岡田忠重(八重の平)の二宅を訪ね、「サンカとは何ですか?」の証言をもらう。その夜、日向市の成合宅でくつろぐ。

5/3 日向市立図書館。5/4 荒川、成合、シャシュの三人で鳥ノ巣(西郷村)へ握り飯を持ってエンヤ。

5/5 日之影の小川鉄兵宅に立寄ってから、熊本市へ。県立図書館で明治二十年の新聞二紙をみる。翌日も同館にこもる。

5/6 午後四時熊本ICから九州自動車道に入る。東へ向う。広島の宮島SAで一泊

5/7 午後十二時、鴨川へ戻り着く。

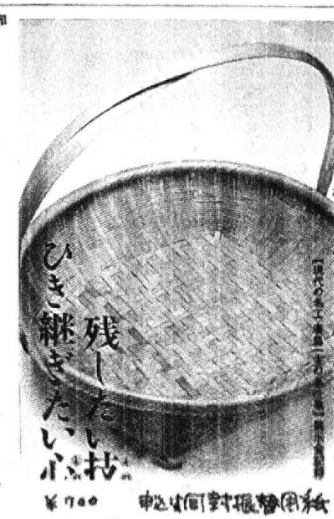
「カラを求める望郷の旅は一九七九年からはじまり、一九九年まで、約二十年にわたっている。カラはわたしの遠い祖先の故地である。

わたしは祖母が出た讃岐でカラに目覚め、カラの故地である加耶諸国に飛んでから、カラのポテンシャルを吸収して朝鮮半島を席巻した新羅（シルラ）の千年王都慶州（キョンジュ）にいたった。とって返して耽羅（タムラ）（済州島）、対馬をみながら筑紫、豊国、琉球、伊予（イヨ）、淡路（アジュド）とカラの足跡をたどり、飛鳥、近江の国家形成でカラがどのように変質して、そのカラが地下水脈に流れて武蔵や毛野の東国にどのように湧出したのかについて、わたしは考えた。カラはけっしてひさく固まった偏狭なものではない。結果として、「内なるカラ」の旅は極東アジアの古代歴史紀行になった。」

（本書の「おわりに」から）

『内なるカラ　―　アジアの土につながる』
綾井 健著　社会評論社　2700円＋税
2013年5月刊

本書は、写真は写真資料から四十三カットを選び、B5判を横に使っている。文章は各章組みとなっている。モノクロ写真が有効にレイアウトされている。写文ともに、著者の眼はゆらぐことなくカラを掘り下げ、また、カラ水脈をどこまでもたどっていく。すでに本紙でとりあげた戦場カメラマンのクメール、エンドレスの工夫と美を追う竹細工職人、そして、このカラを手離さない表現者。この人たちには選ばれる必然がある。それは時代を超えた狂気でもあろうか。



『現代の名工 廣島一夫の手仕事展示会記録集』
VPOはたりもったり 二〇一三年一月 本紙取材本
故廣島一夫の作品群が載っている。
カメラは荒川健一、ブックデザインは中山銀士。
両人のコンビであまたの写真構成本が出版されているが、この書はひときわ鮮やかである。多くの職人を撮ってきた人でなければ届かない視線が注がれている。

5/12 トカラ塾。大久保実香氏（琵琶湖博物館）による、「（山梨県早川町）茂倉集落の人と暮らし」

2013年

「できることは自分たちでやる」という意気、実際に成し遂げてしまう知恵と技術は、心底かっこいい。ただ、この村の子供の声が郷音くのは、孫たちが帰省したときだけだ。村育ちの若い世代のほとんどは、町へ出て仕事をしている。たった三世代の間に、その暮らしの在り様はどれほど変わったことだろう。ふと、私の家族のことを考える。村で暮らす老夫婦に私の祖父母と、村を離れた世代に私の親を、町育ちの子供たちに私自身を、重ね合わせる。村を離れて暮らすということ、それを取り巻く背景と感情の機微について、考える。

（講師の開講告知文から抜いた）

再四　歩いたり、休んだり。

5/24 浅間山の南麓にある御代田町に、重田穂積さんが宅を訪ねる。夕食時、お母さんが用意してくれた鯉の煮付けと蕗がおいしかった。

5/25〜26 上田市の別所温泉センターで竹細工教室を開く。十人ほど参会。教える人は重田穂積とシャシュ。盆ザルを編む。企画した人は地元竹遊会の代表である松尾昌彦。

5/25 夜、上田市三塚の野り邸で大ご馳走になる。野川夫婦を含む8人の宴。夫婦は築80年の農家をアレンジして豊潤な時空に暮らしている。

5/26 夜、皆と別れて、トンネルを三つくぐって、松本市の北郊に出る。通りすがりにあった文化センターの駐車場で一泊。

5/27 松本みすず細工の会の面々と合流して、松本民芸館見学。昼には市内でおいしいソバを食べる。終えて、会の仕事場に移り、ここで、笑い転げての茶話会。

6/15 鴨川の本社屋の軒下で宴。参会者：根上、遠坂、岡辺、荒川、笠井皆川、上野、斎藤

6/16 代集落の鎮守の森のそうじと小径の草刈り。その合間に、背負カゴの修理。

6/17 後、岩国の藤井吉朗氏とその若い友人たち来訪。藤井氏は前日の対ウェールズ戦ラグビー観に。

6/29 トカラ塾「アジアの大道商人」語り部は和賀正樹氏。むき出しの庶民の営みをカメラ片手にとらえたタビをアジア各地で試みたレポートである。その熱い視線は郷里の路地にも向けられ、『熊野・被差別ブルース』田畑稔と中上健次のいた路地』の著書もある。

6/30 「のたうち回って半世紀ーケと島とタビと」ワインバーでシャシュが語る。会場は京王線の仙川駅近くの「わいん場」080-9022-2976

7/07 トカラ塾「密貿易とナナツヤマ開拓」日本復帰前のトカラの実像を、当事者の証言で証す不公開部分の戦後史。講師はシャシュ。